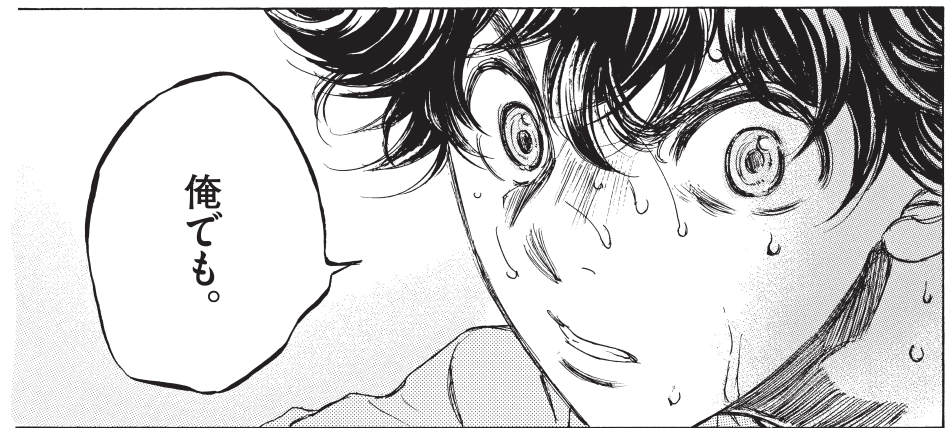


# 『アオアシ』はスポーツ漫画を 次のステージへ進める

小林有吾

(漫画家)

スポーツ漫画という一大ジャンルの中、数々の名作で題材にされてきたサッカー。あらゆるドラマが探り尽くされたように思われていたところに、プロ選手さえ称賛する新しいサッカー漫画が登場した。多くの作品で使われてきた題材であっても、なお新しい物語は生み出せる。『アオアシ』をサッカー漫画の新領域へ到達させた推進力は何なのだろうか？



主人公・青井葦人（アシト）。上空から見下ろすかのようにフィールドと選手を見渡せる広い視野「俯瞰の目」により、異質なゲームメイクをする。コミックス11巻より。

——人気スポーツのサッカーを題材にした漫画は昔から脈々と描かれ続けてきて、もはややり尽くされてしまったようなイメージがありました。そこへ新しい物語を生み出し、連載していくにあたり、どのような勝算がありましたか？

小林 「週刊ビッグコミックスピリッツ」編集部の荻野克展さんから、「Jリーグの高校年代、つまりユース年代のサッカーをテーマに」とオファーを受けました。サッカー漫画を描きたいという思いはなかったのですが、漫画家として殻を破れないでいる僕にそれまでもチャンスを開けていた荻野さんが言うことです。理由があるのだろうし、そんな意外なオファー自体が心を捉えました。

理由を聞いてみたところ、「『てんまんアラカルト』（講談社）で動きのある線を描いていたし、サッカー好きだと言ってたから」という「表向き」っぽい回答はありましたが、荻野さんの直感と、心をつかんでしまう得体の知れない握力で引き寄せられたように思っています。

当初は「とんでもない」と一度はお断りしたのですが、誰もユースを題材に描いていないという新しさが引かかかっていて、しばらく保留にさせてもらったんです。企画を寝かせているうちに、頭の中でアイデアがグルグル回り出し

てきて、半信半疑で取材を始めてみることにしました。確か連載の八カ月くらい前だったと記憶していますが、大宮アルディージャや柏レイソルに取材をお願いして、クラブハウスを見せていただいたり、選手や監督、コーチの方々からお話を聞かせていただいたりしているうちに、取材がとて楽しくなってきたのです。

僕はプロフェッショナルの方の話聞くのが大好きで、その人の半生とか、生き方とか、どうやってそこにたどり着いたのかという経緯にも興味があります。サッカーが大好きで、考えてフィールドに立っている選手の方たちの話を聞いていると、僕自身のプロフェッショナル意識や漫画家になりたかった頃の気持ちと重なって、そこにあまりにも共通する部分が多かったのです。

## 王道にして斬新、 相反する命題を両立させる

——『アオアシ』では、選手がどれだけ言語化できるかが重要視されていますね。

小林 上手な選手の方々には、イメージや経験を言葉に落とし込んでいる人が多かった印象があります。ただ、現役のクラブユース生には声

をかけないということは、決めていました。理由の一つは、一〇代の子はまだ言葉への落とし込みが十分にはできないだろうと考えたからです。もう一つは、僕が成長過程にある彼らに何かを聞くことで、その選手が調子を崩すなど悪い影響をもたらす可能性があるんじゃないかと懸念したためです。

——一〇代の子といえば、プロ育成のためのユースか、高校サッカーか、という議論は作中でも扱われていましたね。

小林 高校かユースかということに限らず、どういう状況であっても必ず表に出てくるのが才能というものだと思っています。環境のせいであってこれなかった、潰れたという話はサッカーに限らずあるわけですが、それは嘘だと思わないでほしいですか。それはどの仕事、職種であってもそうではないでしょうか。

劇中、プロをあきらめて大学進学を選んだ中村平なむらひらなどは、成功していく仲間を眺めているときの他の仲間たちの様子を間近で見えたキャラクターです。ユースを描く以上、そこで通用しなかった人も描かなければいけない。チームを去っていく平のことは、今まで見てきた辛い表情をしている人たちの顔をずっと、いっぱい思い浮かべながら描きました。